

## D.H. ロレンスの収支決算<sup>1)</sup>

### —D.H. Lawrence Memoranda Book<sup>2)</sup>に見られる収支

佐藤 治夫

#### D.H. Lawrence's *Memoranda Book* as an account book and the publication of *Lady Chatterley's Lover*

Haruo Sato

##### Abstract

D.H. Lawrence's *Memoranda Book* (Northwestern University Library) clearly describes the scope of his economic life and the monetary transactions because of the success of his private edition of *Lady Chatterley's Lover*. *Memoranda Book* is filled with his records of cheques and cash payments for the sale of the copies of the edition. The present author traced the *Memoranda Book* to know the scope of his dramatic improvement, together with his minute records of the cost of preparing the edition and his final assessment of the whole venture. The material was found to contain many leads to the general condition of the publication of this most disputed work of D.H. Lawrence.

**Key words** : D.H. Lawrence, *Memoranda Book*, *Lady Chatterley's Lover*, private edition

##### 『チャタレイ婦人の恋人』執筆

ロレンス (David Herbert Lawrence 1885-1930) の代表作とも言える、『チャタレイ婦人の恋人』(以下 *LCL*)は、そのアウトラインからすると、3回執筆されている。執筆順にあげると、*The First Lady Chatterley* (1944年出版) *John Thomas and Lady Jane* (1972年出版)そして、*Lady Chatterley's Lover* (1928年出版)である。日本での所謂「チャタレイ裁判」からもわかるように、もっとも世界中を騒がせた「猥褻」の代表作と思われていたのは、*Lady Chatterley's Lover*であった。執筆直後から、ロレンス本人も出版が困難なことは予想し得た作品であることは、手書き原稿をタイプ原稿に写

す作業を頼んだ相手に、内容の「猥褻さ」故に断られ、別のタイプ清書者を探したこと(書簡番号 4254, 4255<sup>3)</sup>)からも想像がつくことである。

セッカー社のマーチン・セッカー宛の書簡 1928年3月9日付け(書簡番号 4331)で、「この本は爆弾みたいなもの」と相手を驚かせないように気遣って書いているが、用心のため出版予告チラシでは、*Lady Chatterley's Lover*の後に小さく *John Thomas and Lady Jane* と入れてあるにもかかわらず、書簡には *LCL* の名称を使っていないことも、書簡の自信に満ちたロレンスの書き方に反して、社会的に受け入れられるかどうか、ロレンス本人が過敏になっていた証左であろう。

ロレンスの周囲の友人に原稿を読ませたの反応からして、英国、米国内で公に出版して、官憲が不介入の立場を取ることがあり得ないのは、ロレンスにも明白であった。すると残された選択肢は二つ、出版を見合わせるか、それとも別の形で出版を望むかであった。ロレンスは後者を選択し、私家版『チャトレイ婦人の恋人』を目指したのである。

1928年3月9日にフロレンスのオリオリ (Giuseppe Orioli) に原稿と、出版予告チラシ (1928年5月15日に出版予定) を発注している。当時のイタリアの植字工は英語がまったくわからなかったようで、植字を拒否されることもなく (ただ誤植には悩まされたが) スムーズに出版に漕ぎつけている。万一、売れなかった場合は、たぶん出版費用と発送に関する封筒、ラベルなどの経費の九割以上を抱え込まねばならないリスクを考えると、かなり思い切った行動といえよう。この *Memoranda* の解析は、この期間のロレンスの行動を知る有力な情報と取り得る。

### Memoranda

その生涯の殆どを、金の苦勞で過ごしたともいえる、ロレンスは、その晩年になって、『チャトレイ婦人の恋人』販売からのそれまで無かったような規模の収入が入るようになる。販売方式は、ロレンス個人が出版元となり、印刷をオリオリに依頼し、発送、集金をロレンスが行い、その中から、規定の10パーセントをオリオリや印刷所への支払い分を、読者などからの入金後に払う方式を採用している。このように複雑な販売まで著者が行うために著作とは異なり、完全に心覚えのためのメモ帳が、米国ノースウェスタン大学図書館に収蔵されており、ロレンスの晩年の1927年から1929年にかけての、収支が分かる貴重な資料となっている。

表1からもわかるように、1～5ページまで

は、1927年から1928年への、写真や自作の絵画作品受け渡しメモとなっており、収入・支出に直接影響していないので本研究の対象とはならない。

入出金控えの構成としては、10ページ (1928年3月28日付の収入が最初) から始まるが、その直前にある、私家版 *LCL* への、出版経費明細 (8～9ページ)、そして最も重要な収支決算書 (7ページ) (出版予告から1年経過した1929年3月26日付)<sup>4)</sup> の3部分から成立している。

この両者の間には、私家版 *LCL* の出版経費明細が入っており、9ページの先頭部分の、12月14日分としての総経費 ('total cost') は、364ポンド10シリング9ペンスとなっており、収支決算書の抹消部分と一致している。20世紀初頭の英国で一般的に300ポンドあると、執事を使って「ジェントルマン」の生活ができると考えられていた時代での金額であるから、出版を決めたときのロレンスは、ギャンブラーのように「賭け」にでたと考えられる。この出版が「当たらなければ」この金額の借金をさらに背負い込むのは明白だったからだ。

表1に一覧として示した、この *Memoranda* のページ内容は、一部出金内容も含むので、正確には入出金帳簿とすべきものであるが、ロレンス本人はあくまでも、メモとして記入しているので、あくまでも小切手の換金 (官憲に書籍そのものが、猥褻を理由に差し押さえられた場合は返金) などの心覚えとしているために、「入金控え」としている。

### 入金状況

私家版の売り上げによる入金は、大きく現金と小切手に分けられる。また、金種は、英ポンド、米ドル、伊リラ、仏フランの4種類が混在しており、人気のほどが伺われる。

現金収入については、最も早く注文を出したのが、出版元の Pino Orioli であり、5月の出版

表1 D.H. Lawrence's MEMORANDUM

Page	Contents	Page title by Lawrence	Year	Month	Date	First	Last	Page #
1	Curtis Brown への写真, スケッチの送付控え	send to Curtis Brown…	1927	6	14			
2	Curtis Brown への写真, スケッチの送付控え	NA	NA	NA	NA			
3	Curtis Brown への写真, スケッチの送付控え	NA	NA	NA	NA			
4	BLANK							
5	Dorothy Warren への自 作の絵画の送付控え	Pictures sent to Dorothy War- ren	NA	NA	NA			
6	BLANK							
7	収入決算書	Paris.	1929	3	26			
8	Lady Chatterley 出版経 費明細書	Corpus Domini.	1928	6	7			
9	Lady Chatterley 出版経 費明細書		NA	NA	NA			
10	Lady Chatterley 関連入 金控え	Cash for Lady Chatterley	NA	NA	NA	-/3/28	-/7/4	
11	Lady Chatterley 関連小 切手入金控え	Cheques for Lady Chatterley	1928	4	4			2
12	Lady Chatterley 関連小 切手入金控え	Cheques for Lady Chatterley	1928	4	4			3
13	Lady Chatterley 関連小 切手入金控え	Cheques for Lady Chatterley	1928	4	16			4
14	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady Chatterley	NA	4	25			5
15	Lady Chatterley 関連米 貨小切手入金控え	Dollar Cheques for Lady Chatterley	NA	4	25			6
16	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady Chatterley	1928	5	1			
17	Lady Chatterley 関連米 貨小切手入金控え	Dollar Cheques for Lady Chatterley	NA	5	15			
18	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady Chatterley	NA	5	15			
19	米貨小切手入金控え	Dollar Cheques	1928	6	6			

20	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/7/3	-/7/28	
21	Lady Chatterley 関連入 金控え	Cash for Lady Chatterley	NA	NA	NA	-/7/20	-/12/14	
22	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/7/27	-/8/7	
23	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/8/4	-/8/22	
24	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/8/23	-/9/11	
25	Lady Chatterley 関連米 貨小切手入金控え	Dollar Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/8/22	1929/2/17	
26	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	NA	NA	NA	-/10/2	-/12/14	
27	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	1928	12	18			
28	Lady Chatterley 関連入 金控え	Cash for Lady C.	1928	12	28			
29	Lady Chatterley 関連英 貨小切手入金控え	English Cheques for Lady C.	1929	3	2			

注 Year, Month, Date はロレンス本人の記載による。

Page #はロレンスの記入によるものを示す。

First, Last は、日付無きページでの日付の最初と最後を示す。

BLANK は記載なしのページを示す。

予定のところを1928年3月28日に185伊リラ<sup>9)</sup>をロレンスに送っている。現金収入は、10, 21, 28の3ページに渡っており、ロレンスのメモの付け方を明確に示している。

1～3ページまで記入された *Memoranda* を前にして、ロレンスが記入を始めたのは、余裕を持って9ページ目まで「飛ばして」、10ページ目で、最も早く到着した上記のPinoからの入金を記入し始めたが、(本人が一番驚いたかもしれないが) 続々と到着するポンド小切手を11ページからも記録し始めたのである。

表1からもわかるようにロレンスがつけたページタイトルが最初の11～13ページは、

‘Cheques for Lady Chatterley’ となっており、米ドルでの小切手の到着をまったく予想していなかったことがわかる貴重な資料と言えよう。

概略の銀行との取引は、

- 1) 1928年3月末日で一応の締めを行い、翌4月18日に銀行に預金(小切手は換金の必要もあった)として、それまでの現金・小切手を預け、預金の合計が126ポンド8シリング6ペンスとしている(13ページ)。同時に、現金を1,000伊リラ引き出している。ロレンスはそれまでに到着した3枚の米ドル小切手(40ドル分)を預金せず、手元に残している。

- 2) 1928年4月25日, 19ポンド16シリングを, また1928年4月30日には, 81ポンド3シリングを(多分)ポンド口座に預金している(14ページ)。
- 3) 1928年5月3日, 米ドル小切手160ドル分を, イリラ口座に預金(15ページ)。
- 4) 1928年5月14日, 81ポンド15シリングをポンド口座に預金している。ロレンスの計算では, この時点でのポンド預金は, 311ポンド2シリング6ペンスとしている(16ページ)。
- 5) 1928年6月1日, 米ドル小切手340ドル分などを, リラ口座に預金し5,735.35リラの預金高となる。この時点での受領米ドルは, 合計563ドル(17ページ)。同ページ中段には, 妻‘Frieda took away 500.00’とあり, giveでなくtake awayを使っている部分が, ロレンス夫妻の力関係を物語っている。
- 6) 1928年5月23日, 35ポンド6シリングを, ポンド口座に預金し, その直後到着した別の小切手も含んで, 合計が346ポンド8シリング6ペンスとしている。1928年5月30日, ポンド預金合計は376ポンド6シリング6ペンス, 1928年6月22日には, Orioliに支払った40ポンドを差し引いても, 348ポンド6ペンスとなる(18ページ)。
- 7) 1928年7月10日, 60米ドル分をイリラ口座に預金し, 預金残高が6,144.70イリラとなる35ポンド6シリングとなる。また, 1928年7月23日締め切りの計算では, この時点での米ドル受領額は, 693米ドルとなっている。1928年9月4日時点での, 米ドル預金高は, 829.50米ドルとなっている(19ページ)。
- 8) 20ページには, 興味ある記述が見られる。日付は入っていないが, 1928年7月18日と20日の間に記入されたはずであるが, その時点でのポンド預金額は, 362ポンド2シリング6ペンスで, 受領総額は, 402ポンド2シリング6ペンスとなっている。
- 9) 21ページは, イリラ, 仏フランの小額の現金収入の記述にとどまる。
- 10) 22ページも, ポンド小切手の入金明細となっている。
- 11) 23ページは, 1928年8月17日時点での預金残高が503ポンド4シリング9ペンス, 総計の収入が677ポンド12シリング9ペンスとしている。1928年8月31日の時点では, 収入総計は701ポンド13シリング9ペンスに達している。との記述がページ最終行にあるが, 同じ行に‘(rest sent to England)’とあり, 英国銀行にも口座があったとも解釈できる記述となっており, ロレンス家の財政状態を把握するには, この点についても今後の検討が必要であろう。
- 12) 1928年9月4日には, ポンドでの受領総額が769ポンド11シリング9ペンスに達し, 初めてロレンスは, 各通貨での受領総額を記入し, 1,000ポンドを超えて, 1,013ポンド10シリング9ペンスに及ぶとしている(24ページ)。
- 13) 1928年12月7日には, 米ドルの受領総額が1288ドル50セントに, 翌1929年2月17日には, 1341ドルに到達している(25ページ)。
- 14) ポンド預金も1928年12月14日の時点で, 982ポンド9シリング9ペンスに, また, 受領総額も1,360ポンド9ペンスに達している(26ページ)。
- 15) 1929年2月17日の時点で, とうとうロレンスのポンドでの収入総額が, 1,209ポンド5シリング3ペンスに到達(27ページ)。同じ日付の集計にて, 現金(通貨単位を問わない場合)による収入が, 124ポンド17シリングに達していることが計算されてい



ントならびに郵送料などを差し引いたものが、私家版の出版によるロレンスの純益となるはずである。しかし、ロレンスが幾分か予測していたはずではあるが、*LCL* を猥褻文書とする英米官憲の取締りのために幾分かロスが生じている（書簡番号 4562）。*LCL* が没収されてしまった場合は、書籍代金としての収入はゼロとなり、ロレンスはそっくり読者に返金しているので、一冊 2 ポンドで 1,000 部販売した場合の、2,000 ポンドマイナス 15,000 リラ（約 163 ポンド）マイナス 200 ポンドマイナス発送費用の収入には到達していないのはもちろんである。

収支決算書（7 ページ）<sup>4)</sup>は、上記のすべてが一段落し、ロレンス自身が出版が成功裡に一段落したフランス滞在期に相当する。本人の計算では 1929 年 3 月 26 日現在の、受領総額（‘gross receipts.’）は、1,629 ポンド 6 シリング 3 ペンスとなっているが、興味深い点は、総経費（‘total cost to date’）が一度は、364 ポンド 10 シリングと記入されているのに抹消（本稿ではストライクアウトで示されている部分）されている点である。

ロレンスは、手計算にて（たぶん暗算であつたろう）にて、‘Gross receipts. £1629.. 6 .. 3’ から、‘total costs to date=£364..10.. 0’ を引き算して得た答えを抹消した総利益（‘total profit to date£1264..16.. 3’）を記入してしまい、そこで間違いに気づいたものと思われる。このままでは、Orioli 宛に支払われる手数料 10 パーセントの支払い根拠が純利益の 10 パーセントとなり、契約と異なる。故に、金額は同じ £1264..16.. 3 でも、項目は粗利益（‘Gross profits to date=£1264..16.. 3’）と書き換えている。ここからは、極めて順当に ‘10% of gross profits=126.. 9 .. 0’ と Orioli 宛の手数を計算しているが、実際には、126.. 9 .. 0 は不正確で、126.. 9 .. のあとに 7.5 ペンス無いと正しく 10 パーセントにはならない<sup>5)</sup>。

しかし、Orioli（タイプスクリプト内では、ニックネームの ‘Pino’ となる）宛の支払い済みの手数料 ‘102..10.. 0’ から、Orioli 宛の残金 ‘due to Pino 23..19.. 0’ の実際の支払い、‘Paid to Pino Orioli as 10% discount.’ を ‘£24.’ としており、今度は少し実際より 5.5 シリング多めに払っているので、計算は概ね正確となる。それまでの収入計算では大変細やかに計算していたロレンスが、最終の詰めとも言える収支決算で、1 シリング余分に支払う結果となった理由は今のところ不明である。

#### むすび

1929 年 3 月 26 日に収支決算をしたことは、この時点で私家版 *LCL* の在庫が無くなったことを想像させる。しかし、バルクディスカウント制度なども販売に導入した形跡があり、必ずしも当初の販売形態である一律 1 冊 2 ポンドという形態とはなっていないため、また、官憲による没収も含めると、*Memoranda* の 10 ページ日以降の、個人・企業名での入金額だけでは、売り上げの金額がわかるだけで、実際に読者・書肆に渡った「冊数」が不明となっている。今後の課題としては、送金した読者と作家との関係、所謂ロレンスの友人はどのくらいその中にいたのか、などについて、個々の入金（返金も含む）項目の検討と、現存する種々の書簡集との突合せが必要と思われる。

*Memoranda* をロレンス自身の心覚えとして考えれば、本論文で明らかにした、*LCL* の出版経費などの記録となる。一つにまとまった資料としては、ロレンス自身の経理の方法、ロレンスの経済活動の解明に光明を投げかけるものである。

#### 注

- 1) 本研究は、日本大学歯学部佐藤研究費の援助を受けての研究である。また研究成果は、著者の

所属する D.H. ロレンス書簡研究グループ（研究代表者：須田理恵—日本大学，相良英明—鶴見大学，市川 仁—中央学院大学）の研究の一部を構成し，同グループの資料を一部使用している。今回は特に，市川の Memoranda タイプスクリプトに拠る部分がある。

- 2) 米国ノースウェスタン大学図書館スペシャルコレクション *D.H. Lawrence Memoranda Book* は，ロレンス手書きのメモ帳（‘Memoranda’ の表紙が二葉）であり，本研究ではマイクロフィルム（D.H.L.M. June 1983）からの，複写原稿をもとにしている。内部は，本研究の分析対象である『チャトレイ婦人の恋人』印刷・販売に関する部分と日記風の大変短い記録部分となっている。上記のタイトルは，ノースウェスタン大学図書館での名称である。本研究でのページ番号は，同資料にはなく独自のものである。
- 3) 本文は *Letters of D.H. Lawrence*, Cambridge U.P. 19879-1993 VOLS. 1-7 に拠っており，書簡番号は同シリーズの書簡集に拠る。
- 4) *Memoranda* page 7 の佐藤治夫によるタイプスクリプト

Paris March 1929.

Total money received in English cheques, to date.	£ 1224..5..3
“” “” “” in cash “” “”	£ 136..17..0
“” “” “” in dollar cheques “” “”	<u>£ 268..4..0</u>
Gross receipts, Mar.26.1929	<u>£ 16929..6..3</u>
<hr/> total cost to date	<hr/> £ 364..10..9
Gross profit to date =	£ 1264..16..3
<hr/> total profit to date	<hr/> £ 1264..16..3

10% of gross profits = 126..9..0  
 already paid to Pino = 102..10..0  
 due to Pino = 23..19..0

Paid to Pino Orioli as 10% discount	£ 24.	March 26. 1929
	to Carletto	£ 1
	To Pino and Carletto	£ 25 March 26./29
final gross profit	£ 1239..16..3	March 26.1929
Paid in all to Orioli for percentage	£ 126.	- to Carletto £ 8. - March 26 1929
to Pino to date.	£ 10..10..0	Florence 10 July 1929
“” Carletto “” “”	£ 1..0..0	“” “” “”
“”		

上記のタイプスクリプト中の ‘.’ は各々がポンド，シリングの境界を表している。

- 5) 当時のレートは，92 イリラ = 1 英ポンドのレートであった。また，13 ページ 6 行目の記述から，250 仏フランが 185.60 イリラであったことがわかる。本文中は，ポンドは英ポンドを指す。
- 6) 井上義夫『地霊の旅 評伝 D.H. ロレンス III』小沢書店 1994 p.387
- 7) ロレンス本人は，一時初等教育担当の教師をしていたので，まさか単純な計算ミスなどではあり得ないが，当時の商取引習慣が未解明なものあって，理由が不明である。決算書の最終行には，‘Paid in all to Orioli for percentage £ 126.’ となっており，これも実際の支払額より 10 シリング少ない金額となっている。